平成 30 年度

青少年赤十字海外支援事業

ネパールスタディーツアー　報告書

実施期間：平成 30 年 12 月 22 日（土）～29 日（土）

派遣国：ネパール連邦民主共和国

主催：日本赤十字社

日本赤十字社
Japanese Red Cross Society

青少年赤十字海外支援事業スタディーツアー報告書目次

・青少年赤十字海外支援事業（ネパール）概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

・青少年赤十字海外支援事業スタディーツアー概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

・派遣スケジュール ・・・ 3

・滞在記録・写真

1 日目（12 月 22 日）・・ 4

2 日目（12 月 23 日）・・ 6

3 日目（12 月 24 日）・・ 8

4 日目（12 月 25 日）・・ 10

5 日目（12 月 26 日）・・ 12

6 日目（12 月 27 日）・・ 14

7 日目（12 月 28 日）・・ 16

8 日目（12 月 29 日）・・ 18

・参加者感想・ワークショップ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20

・青少年赤十字指導者（団長）感想・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 38

・青少年赤十字指導者 感想・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 40

・日本赤十字社 青少年・ボランティア課職員 感想・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 41

青少年赤十字海外支援事業（ネパール）概要

「青少年赤十字海外支援事業」は、日本の青少年赤十字メンバーの奉仕精神を醸成して、対象国赤十字・赤新月社の青少年赤十字メンバーの健康・安全の確保を図り、国際理解・親善を促進することを目的として平成 29 年度からネパール・バヌアツという国を対象に実施されている。青少年赤十字活動資金（１円玉募金）が財源の一部として使用されているこの事業では、支援を受けた子ども達たちが活動の中心になり主体的な担い手として貢献することが期待される。

対象国	ネパール連邦民主共和国
事業期間	事業期間：平成 29 年４月１日～平成 32 年３月 31 日
対象地域	パルバト郡、シャンジャ郡
事業実施背景	ネパールでは未だに毎年 2 万人以上が水や衛生に起因した病気で命を落としており、また、不衛生な環境の中で下痢に悩まされることも多く、5 歳未満児の死亡にも繋がっている。 対象地域となるシャンジャ郡、パルバト郡で事業開始後に実施したベースライン調査によると、授業等で水衛生に関した教育を実施している学校は全体の 41.3%にとどまっており、子どもたちは手洗いのタイミングや水に起因する感染症の防ぎ方の知識が十分ではない。 コミュニティにおいても、トイレの後に手を洗う人の割合は全体 47%、料理をする前に手を洗う人の割合は全体の 31%など、手洗いの慣習が根付いておらず、学校から地域まで衛生環境改善の取り組みを普及する必要が生じている。
事業目的	学校、コミュニティにおける水衛生環境の改善
活動内容	・学校の教師や青少年赤十字メンバーを対象に、手洗いの重要性や簡易手洗い場の作り方などの研修を実施。 ・「正しい月経の知識を知って生活を変えよう」というスローガンのもと、対象校にて月経衛生管理に関する授業を開催し、正しい月経の知識を普及。 ・対象校において、水供給システム・水タンクやトイレ・手洗い場の改善。簡易手洗い場の建設。 ・青少年赤十字メンバーのリーダーを中心に、学校の周りにある地域の家庭訪問を実施し、家庭における正しい水の使い方や台所の清掃の仕方などをモニタリング。 ・石鹸や洗剤、トイレブラシ、軍手など衛生関係の資材を学校に供給し、常に清潔な状態を維持。
写真	 左：事業実施前の学校のトイレの様子。清掃員がおらず、不衛生な環境である（平成 29 年 1 月）。 右：事業実施後に学校にできた簡易水道場で手を洗う子ども（平成 30 年 10 月）。

青少年赤十字海外支援事業ネパールスタディーツアー概要

1　目的

青少年赤十字活動資金（通称：１円玉募金）等を用いて平成 29 年度より実施している青少年赤十字海外支援事業に関連して、現地における実際の募金の使われ方および募金によって改善した現地の状況を確認することで、事業への参加意識を芽生えさせること。また、支援対象の国の青少年との交流や活動を通じて青少年赤十字の実践目標「国際理解・親善」について実体験を通じた学びを得、今後の青少年赤十字活動及び国際社会においてリーダーシップを発揮する人材を育てること。

2　派遣場所

ネパール連邦民主共和国　シャンジャ・パルバト

3　日程

（１）第１回事前研修：平成 30 年９月２日（土）
（２）本日程：平成 30 年 12 月 22 日（土）～12 月 29 日（土）
※第２回事前研修は平成 30 年 12 月 22 日(土)出国前に実施
（３）事後研修：平成 31 年２月３日（日）
（４）報告会：平成 31 年３月 22 日（金）

4　参加者一覧

	氏名	県名	学校名	学年/所属
メンバー	秋田　流有	青森県	青森県立青森南高等学校	２年
	岡田　柚佳	山形県	山形県立山形北高等学校	２年
	坂田　実紀	福島県	福島県立白河旭高等学校	１年
	常川　美羽	神奈川県	洗足学園高等学校	２年
	大家　秀喜	石川県	石川県立翠星高等学校	１年
	的場　祥之介	大阪府	羽衣学園高等学校	２年
	廣瀬　未沙	兵庫県	滝川第二高等学校	２年
	小野　陽香	岡山県	岡山県立西大寺高等学校	２年
	根岸　咲	熊本県	熊本県立大津高等学校	２年
指導者（団長）	中村　友是	青森県	柴田女子高等学校	教頭
指導者	松尾　一志	佐賀県	佐賀県立白石高等学校	教諭
日赤職員	矢田　結		本社青少年・ボランティア課	主事
	沼倉　朋恵		本社青少年・ボランティア課	主事

4　派遣国における活動

（１）ネパール赤十字社表敬訪問
（２）日本赤十字社ネパール代表（ネパール地震復興支援本部）訪問
（３）事業対象地域の学校訪問
（４）プレゼンテーション（日本とネパール両国の青少年赤十字活動について等）
（５）共同活動（衛生に関する劇の観賞、コーヒープランテーション等）
（６）文化交流

派遣スケジュール

日次	月日（曜日）	地名	現地時間	交通機関	スケジュール【宿泊地】	食事
1	12月22日（土）	東京都内	17:00		日本赤十字社本社に集合	
					事前研修②	夕：弁当
			20:30	電車	羽田空港へ移動	
			21:30		羽田空港着　チェックイン	
					【機内泊】	
2	12月23日（日）		0:20	航空機(TG-681)	タイ国際空港にてバンコクへ	朝：機内
		バンコク	5:25		バンコク着	
			10:30	航空機(TG-319)	タイ国際空港にてカトマンズへ	昼：機内
		カトマンズ	12:45		カトマンズ着	
			14:00	マイクロバス	入国審査後、カトマンズへ移動	
			14:30		ホテルチェックイン	
			15:00		ネパール赤十字社訪問、青少年赤十字活動の紹介	
			16:00		連盟セキュリティーブリーフィング	
			16:30		日赤ネパール代表部　五十嵐さんから復興支援事業のレクチャー	夕：ﾎﾃﾙ
			19:30		ホームルーム	
					【カトマンズ泊】	
3	12月24日（月）		8:45	マイクロバス	ホテル発	朝：ﾎﾃﾙ
			12:35	航空機(U4-609)	ブッダエアにてポカラへ	
		ポカラ	13:30	マイクロバス	ポカラ着	昼：ﾚｽﾄﾗﾝ
					ペワ湖、お土産店など観光	
			17:30		ホテルチェックイン	夕：ﾎﾃﾙ
			20:15		ホームルーム	
					【ポカラ泊】	
4	12月25日（火）		7:30	4WD	ホテル発	朝：ﾎﾃﾙ
		シャンジャ	11:00		Shree Jana Jyoti Secondary School 訪問	
					・ウェルカムセレモニー	昼：ﾗﾝﾁBOX
					・文化交流	
					・衛生に関する劇の観賞	
					・青少年赤十字活動紹介、質疑応答	
			15:30		学校発	
		ポカラ	17:30		ホテル着	夕：ﾎﾃﾙ
			19:30		ホームルーム	
					【ポカラ泊】	
5	12月26日（水）		7:30	4WD	ホテル発	朝：ﾎﾃﾙ
		パルバト	10:30		Shree Saraswoti Secondary School訪問	
					・ウェルカムセレモニー	昼：ﾗﾝﾁBOX
					・文化交流	
					・コーヒープランテーション	
					・青少年赤十字活動紹介、質疑応答	
					・フリータイム	
			15:30		学校発	
		ポカラ	17:00		ホテル着	夕：ﾎﾃﾙ
			19:00		ホームルーム	
					【ポカラ泊】	
6	12月27日（木）		9:00	マイクロバス	ホテル発	朝：ﾎﾃﾙ
			9:45	航空機(U4-608)	ブッダエアにてカトマンズへ	
		カトマンズ	10:30		カトマンズ着	
					市内観光（ダルバール広場、クマリの館）	昼：ﾚｽﾄﾗﾝ
			16:00		ホテル着	
			18:00		ネパール赤十字社主催フェアウェルパーティー	夕：ﾚｽﾄﾗﾝ
					【カトマンズ泊】	
7	12月28日（金）		8:30	マイクロバス	ホテル発	朝：ﾎﾃﾙ
					パシュパティナート観光	
			10:30		空港着、チェックイン	
			13:55	航空機(TG-320)	タイ国際航空にてバンコクへ	昼：機内
		バンコク	18:30		バンコク着	
					ホームルーム	
			23:15	航空機(TG-682)	タイ国際航空にて羽田へ	夜：機内
					【機内泊】	
8	12月29日（土）	羽田	6:55		羽田空港着、解散	

平成30年度青少年赤十字海外支援事業

ネパール　スタディーツアー滞在記録

平成 30 年 12 月 22 日（土）／ 天気 くもり ／記録者 常川 美羽		
日時（時間）	場所	行動
17:00	日本赤十字社本社501会議室	集合
		事前研修
18:00		夕食
19:00		事前研修（つづき）
21:00	浜松町	空港へ移動
21:30	羽田空港	チェックイン

【メモ・感想・感じたこと】※忘れないうちに書き留めておきましょう。

参加メンバーと初めてが最後に会った事前研修から3か月以上が経っていたので、これから8日間共に過ごすことに不安がありました。しかし、いざ再会すると、今まで会えなかった分、会話が弾み、不安が和らぎました。また、物の呼び方が地方によって異なるという話題で盛り上がった時に、今回集まったこのメンバーは青少年赤十字に関わる同じ高校生だけれども、違う環境で育ち、異なる価値観を持っているということを実感しました。そして、全く日本とは異なる文化を持つネパールの人々はさらに違う価値観を持っているはずなので、現地の人々と触れあうことに興味が増しました。

平成 30 年 9 月 2 日（土）第 1 回事前研修・平成 30 年 12 月 22 日（第 2 回事前研修・1 日目）

平成 30 年 9 月 2 日（土）第 1 回事前研修で初めて会ったメンバー。それぞれが調べたネパールのことを発表しあいネパールでの事業の理解を深めました。また、団としてスタディーツアーをどう過ごすかという、目標を考えました。

団としての目標は、**「ネパールのプロになり、ワークショップで発表しよう！」**になりました。

平成 30 年 12 月 22 日（土）、日赤本社で最後の事前研修を終え、羽田空港にて。
これから飛行機に乗ります！

平成30年度青少年赤十字海外支援事業
ネパール　スタディーツアー滞在記録

平成 30 年 12 月 23 日（日）／ 天気 晴れ ／記録者 秋田流有		
日時（時間）	場所	行動
00:20	羽田	空路、バンコクへ
05:25	バンコク着	乗り継ぎ
10:30	バンコク発	空路、カトマンズへ
12:45	カトマンズ着	着後、専用車にてホテルへ
14:00		ホテルチェックイン
15:00		ネパール赤十字社 青少年赤十字課訪問
		・安全管理ブリーフィング
		・地震復興支援事業のレクチャー
18:30		ホテルにて夕食
19:40		チームミーティング
20:00		チェックアウト準備・就寝

【メモ・感想・感じたこと】※忘れないうちに書き留めておきましょう。

ネパール赤十字社の訪問では、主に水など、ネパールで過ごす際に気をつけるべきこと、また3年前に起きた地震によってどのような被害があったのか、それによってどのような対策をネパール赤十字社が取ったのかを学んだ。赤十字社は1つの国に1つしかなく、血液事業や地域保健などの大きな活動の他に、ネパールの地震をきっかけに災害の管理など各地域によって行なっている活動が異なっているのだと感じた。また、日本のJRCとして行なっている活動をまとめた発表では救急法やトレセンをする意義について改めて考えさせられた。また私自身がネパール赤十字社への挨拶を行った際、自分がこのプログラムに参加しようと思ったきっかけを再確認するだけでなく、他のメンバーと共有できたことで刺激を与えることができ、自身が参加する意味について考えることができたのではないかと思う。

また、生活全体として言えることは、行動が遅いことが挙げられた。他にもリュックなどの荷物を後ろに背負うのではなく、前に持つことで自分自身を管理する上で大切だと共有できた。

平成 30 年 12 月 23 日（２日目）

タイ　バンコクで乗り継ぎます

無事、ネパール　カトマンズに到着しました！

ネパール赤十字社からあたたかな歓迎

今回の感謝の気持ちと意気込みを英語でスピーチ

日赤代表部の五十嵐さんから地震復興支援事業のレクチャー。質問が飛び交いました。

今日から毎日、夜はホームルームで１日の振り返りと翌日の確認をします。

平成30年度青少年赤十字海外支援事業

ネパール　スタディーツアー滞在記録

平成 30 年 12 月 24 日（月）／ 天気　　／記録者 的場祥介

日時（時間）	場所	行動
7時	ホテル	起床
7時～	ホテル	朝食
8時半	ホテル	集合
8時45分	ホテル	ホテル出発
9時10分頃	Tribhuvan国際空港	空港到着
10時半予定が11時23分発	Tribhuvan国際空港	出発
12時50分	Pokhara Airport	着陸
15時頃	ポカラ湖	ボート
16時半	ポカラ	お土産店
17時まわり	ホテル	到着

【メモ・感想・感じたこと】※忘れないうちに書き留めておきましょう。

空港へ行った時、とても日本人が多いなと感じた。機内の横が日本人夫婦で写真も撮ってほしいと言われた位だ。Tribhuvan国際空港のセキュリティチェックが甘く、簡単にハイジャックされそうだなと思った。現在の発展途上国のセキュリティチェックはこのような曖昧なチェックが珍しくないそうだ。これではテロリストの格好の的になるのではないかと私は思う。中型のプロペラ機に乗り、遊覧飛行と言っていいほど神々しいヒマラヤ山脈を目にし、感動した。到着し、木製のボートに乗りヒマラヤ山脈を見た時、空から見たヒマラヤ山脈とはまた異なる美しさを出していた。ネパールに居ている間、何度も見てきたがいつ見ても我々人間を見守っているような神に近い存在と思った。ポカラでのお土産店周りでは曲芸を見せお金をくれと言う人や背後にずっと立っていた人などいたが、大半の人々がとても優しくフレンドリーだった。私がお土産を購入した店では少女がレジを担当しており家族皆一丸となって力強く生きているのだなと確信した。

平成 30 年 12 月 24 日（３日目）

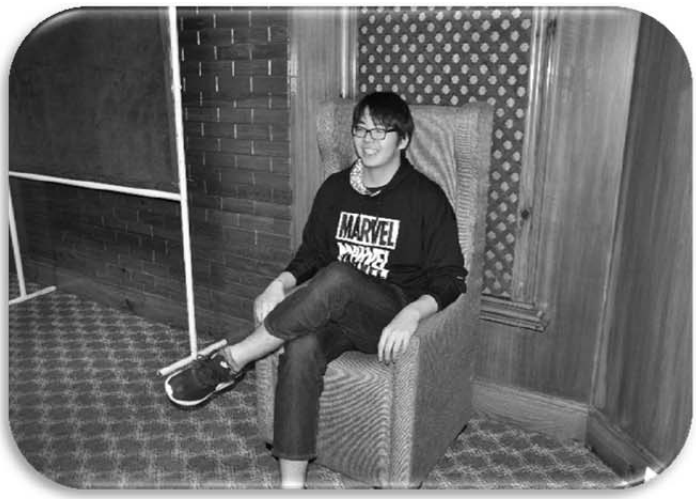
ネパールの国内線「ブッダエア」で、カトマンズからポカラへ

飛行機の中からヒマラヤ山脈が！

初めての「ダルバート」。ネパールの定食です。ミトチャ～（おいしい～）

ペワ湖でボートに乗りました！

夜は明日からの学校訪問に向けて文化交流の練習です



ネパールの王様発見！？

平成30年度青少年赤十字海外支援事業
ネパール　スタディーツアー滞在記録

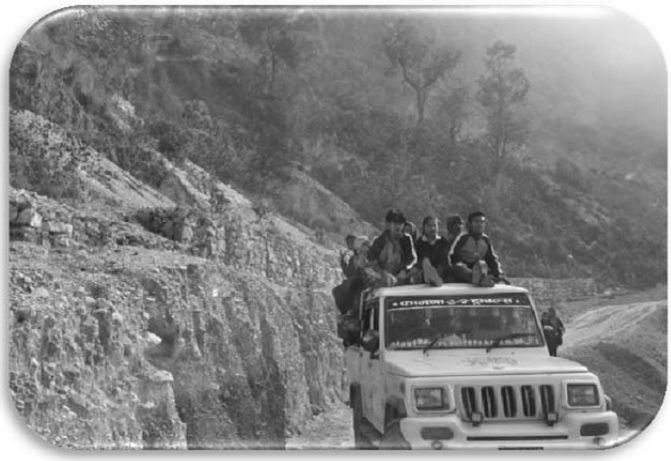
平成 30 年 12 月 25 日（火）／ 天気　　／記録者 岡田 柚佳

日時（時間）	場所	行動
6時00分	ホテル	モーニングコール
6時30分	〃	朝食
7時30分	〃	シャンジャへ移動
11時00分	シャンジャ	Shree Jana Jyoti Secondary
		School 訪問
		・学校からのウェルカムセレモニー
		・文化交流
		・衛生に関するゲーム
		・青少年赤十字紹介
		・フリータイム
15時30分	シャンジャ	ポカラへ移動
18時30分	ポカラ（ホテル）	夕食
	〃	チームミーティング

【メモ・感想・感じたこと】※忘れないうちに書き留めておきましょう。

シャンジャにある学校に行って、まずせいだいなおもてなしを受けたことに感動した。きれいな花を糸でつないで作られたネックレスをたくさんもらうごとに「ナマステ」とあいさつされ、とても素直で優しい生徒さんがたくさんいると実感した。
学校に着くまでの道のりはとても長く、険しくて体調が悪くなったが、日本ではあまり見ることのできない自然や動物を見ることができて嬉しかった。
また、山の斜面に沿って建物があったり、畑があったりして、高山地域のため限られた作物で生活するのは大変だと思った。
また、ドライバーさんの運転技術の高さに驚いた。
道路のセンターラインが引かれておらず、クラクションを何回も鳴らして合図を送ったり、スレスレのところを絶妙のタイミングで通り抜けるのを見たりして、日本の道路状況と全く違うんだなと実感した。
ドライバーさんもシャンジャの生徒のみんなもフレンドリーで、親しみやすいなと思った。

平成 30 年 12 月 25 日（４日目）



今日はいよいよ学校訪問！でこぼこの道を進むと
こんなトラックにすれ違います

学校に着くと、子ども達が列になって歓迎してくれました！

ネパールの感想、感謝の気持ちを述べました。

衛生の大切さについてを教える劇を鑑賞

赤十字のマークがついた簡易手洗い場で手を洗う子ども

皆でお土産交換をし、とても仲良くなりました！

平成30年度青少年赤十字海外支援事業
ネパール　スタディーツアー滞在記録

平成 30 年 12 月 26 日（ 水 ）／ 天気 晴れ　／記録者 小野陽香 根岸咲

日時（時間）	場所	行動
7:45	ポカラ	パルバトへ移動
10:20	パルバト	Shree Saraswati Secondary School 訪問
		学校からのウェルカムセレモニー
		文化交流
		コーヒープランテーション
		フリータイム（昼食）
		青少年赤十字紹介
		フリータイム（質問タイム&お土産交換）
15:30	パルバト	ポカラへ移動
17:30	ポカラ	ホテルに到着
18:30		ホテルにて夕食
19:30		チームミーティング始
21:05		チームミーティング終
21:05		チェックアウト準備、就寝

【メモ・感想・感じたこと】※忘れないうちに書き留めておきましょう。

集合が7時20分と言われていたけれど、20分に集合できず出発が1分遅れてしまった。パルバトの学校へ行くまでの道端の方でコンクリートで水路を作っていたが、道を進んでいくと以前作られた水路が土でいっぱいだったり、ゴミが入っていた。また、学校まで少し歩いた際道が大きな石で固められてゴツゴツしており危なかった。学校に訪問した時、みんなが笑顔で迎えてくれ、とても嬉しかった。歓迎の歌とダンスを披露してくれて、前日の学校でのダンスとは少し違い地域によって踊るダンスや歌が異なる事に気付いた。よさこいは前日の反省を生かし手拍子や一緒に踊ってもらったりし一体感が生まれた。コーヒープランテーションではペアの生徒の家の庭にコーヒーの苗を一緒に植えた。ネパールの人達は道が危なかったりしたら、手を差し伸べてくれたり、危ないよ！ゆっくりね！と言ってくれ優しい人が多いことが分かった。ネパールの人達はみな積極的で一緒に写真を撮ろうと言ってくれたり、話しかけてくれたりフレンドリーだった。発表の時に、周りの子が話しかけてくれたり、することはとても嬉しかったけれど、活動紹介を真剣に聞くことが出来なかった。別れが近づくに連れて、仲良くなった生徒達と離れる寂しさが増していった。最後の最後まで、お見送りをしてくれてとても嬉しかった。今日一日を通してさらにネパールの人々の優しさを肌で感じる事ができた。言葉や国が違えどこころが温まる1日となった。

平成 30 年 12 月 26 日（5 日目）

今日はネパール語でスピーチ！

日本文化の紹介としてよさこいを踊りました。

コーヒーの苗には、日本とネパールの子ども達の名前が
書かれた看板が添えられます。

ネパールと日本でペアになり、一緒に植樹をしました。

頭にティカをつけてもらいました！

最後は皆一緒にダンス！素敵な思い出となりました！

平成30年度青少年赤十字海外支援事業

ネパール　スタディーツアー滞在記録

平成30年12月27日（木）／ 天気　　／記録者 坂田 実紀

日時（時間）	場所	行動
7:00	ホテル内	モーニングコール
7:30	ホテル内	朝食
9:15	空港	ポカラ空港到着
10:30	空港	カトマンズ空港到着
11:45	クマリの館	見学
14:00	カトマンズ市内	昼食
15:00～16:00	↓	お土産買入
18:15	↓	フェアウェルパーティー
22:25	ホテル	就寝

【メモ・感想・感じたこと】※忘れないうちに書き留めておきましょう。

今日は主にカトマンズ市内観光を行いました。
朝はホテルのチェックアウトもあり集合時間に少し遅れてしまいました。
空港に着くと飛行機がほぼ時間通りに飛びカトマンズに無事に着くことが出来ました。バスで移動しクマリの館に行くと全然顔を出さないクマリが顔を出してくれました。すごく貴重な体験ができました。
ダパさんからクマリについて色々な説明を受けました。
クマリはネパールの伝統文化ですが、なった子どもはとても可哀想だと思いました。
さらにネパール大地震の資料がある博物館にも行きました。
復興の状況や、その時の様子が写真や現物でよく分かりました。
昼食では、チベット料理を食べました。
独特の鍋や、初めてのモモなども体験してとても美味しかったです。フェアウェルパーティでは、ネパールの本場の料理を食べました。
見た目とは違う味がしたり、辛かったりしたけど美味しかったです。ネパール赤十字社の社長さんから素敵なプレゼントも貰い最高の思い出になりました。
より一層みんなの仲も深まりとても濃い旅になりました。

平成 30 年 12 月 27 日（6 日目）

カトマンズに戻ってきました。町並みも見慣れてきました。

ダルバール広場。地震で建物が崩れてしまい、建て直し中です。

クマリの館で、クマリに会うことが出来ました！

地震博物館では、当時の様子を学びました。

夜は、ネパール赤十字社主催でフェアウェルパーティー。
小さな水がめをいただきました。

ネパール赤十字社の皆さん、ありがとうございました！

平成30年度青少年赤十字海外支援事業
ネパール　スタディーツアー滞在記録

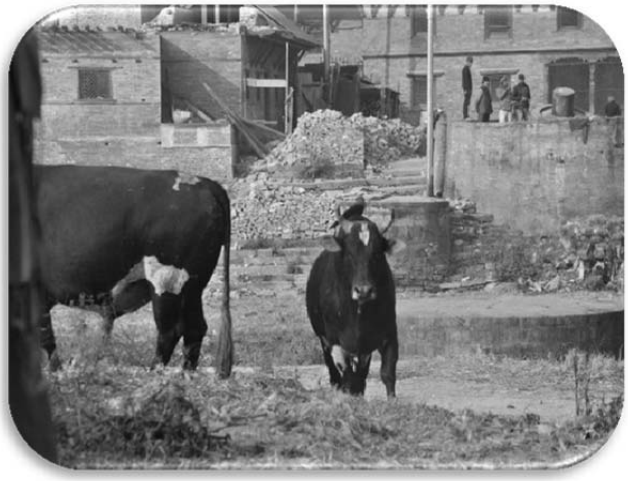
平成　30年　12月　28日（金）／ 天気 晴天 ／記録者 廣瀬 未沙		
日時（時間）	場所	行動
7:00	ホテル	起床
7:00 ～	ホテル	朝食を摂る
8:30	ホテル	出発
	カトマンズ市内	観光（パシュパティナート）
10:10	カトマンズ市内	出発
10:20	カトマンズ空港	到着
13:55	飛行機	出発
18:30	バンコク	到着
19:30	空港内	チームミーティング
23:15	飛行機	出発

【メモ・感想・感じたこと】※忘れないうちに書き留めておきましょう。

ネパール スタディーツアー 7日目。そして、ネパールで過ごす最終日。
今日のメインであるパシュパティナート。自然豊かなこの場所で亡くなった方を焼く姿を見た。亡くなった方に火をつけるのは長男。その言葉は私にとってとても衝撃的なことだった。ホスピスについても同様だ。ただホスピスに関しては、「死と向き合える」場所というのは必要なのかもしれない、とも感じた。
そして、飛行機に乗り、バンコクへ。そこでのチームミーティングは私にとってとても心に残るものであった。それは、みんなの意見が本当に聞けたように感じたからだ。今までは人の意見に対して肯定の反応しか出なかったように思う。しかしパシュパティナートで見た火葬の後の灰の始末についての話し合いをしていた時、「自分はそう思わない。」というようなみんなの意見の違いが感じられた。正解の答えがないからこそたくさんの意見が飛び交ったように思われるが、意見を出せば出すほど自分のことしか見えなくなっていたので、まだまだ良いミーティングではなく、これからの活動で気をつける点だと気づいた。

平成 30 年 12 月 28 日（７日目）

パシュパティナート。ヒンドゥー教の聖地です。



ネパールは動物も本当にたくさんいます。

パシュパティナート観光の後は、いよいよバンコクに向けて出発！ネパールにまた戻ってこれますように。

中継地バンコクでも、ホームルームは欠かしません。

平成30年度青少年赤十字海外支援事業
ネパール　スタディーツアー滞在記録

平成30年12月29日（土）／ 天気　　／記録者 大家秀喜

日時（時間）	場所	行動
6:55	羽田空港	バンコクから帰国
7:30	羽田空港	ミーティング後、解散

【メモ・感想・感じたこと】※忘れないうちに書き留めておきましょう。

今日は、バンコクから帰国だけで特に何もなかったけど
この一週間は、たくさんの出来事があってとても有意義
な日々を送る事が出来ました。
海外に行くのは初めてで最初は不安だった
けど実際に行ってみるとネパールはとても
良い国で現地の人も優しくて、料理も美味
しくて、またネパールに来たいと思いました。
最初に行った国がネパールで良かったと
思いました。
僕にとってとても良い旅になりました。
ネパールに感謝

平成 30 年 12 月 29 日（８日目）

無事、羽田空港に戻ってきました。メンバー一同、ネパールでかけがえのない経験をすることが出来ました！！ダンニャバード（ありがとう）！！

平成 31 年２月３日（日）事後研修

「ネパールのプロになり、ワークショップで発表しよう！」という団の目標のとおり、ネパールの経験をどのように今後の青少年赤十字活動に生かせるか、事後研修で具体的に考えていきました。

ワークショップ(W・S)とは？
経験したことを生かして、どんな青少年赤十字活動をしようか、具体的な行動計画に立案することを「ワークショップ」と呼びます。他の人が読んでわかるように、そして本当に実行に移せるように、5W1H を使って書くことが多いです。

次のページから、ネパールでメンバーが何を学びどう感じたか、そして、メンバー一人ひとりのワークショップ(W・S)を掲載しています。

感想文

「五感で実際に感じたこと」

青森県立青森南高等学校　秋田流有

わたしが青少年赤十字海外支援事業スタディーツアーに参加するにあたって、目標として掲げたことは、自分の五感をフル活用し、現地に行ったからこそわかる「ネパールの深刻な問題」と、先進国であるが故に起こる「日本の課題」を多くの人に共有し知ってもらうことだった。今日は情報社会であるため、日本にいてもネパールのことを知ることができる。しかし、自分で実際に行き五感で感じるからこそわかることがあると思い、このような目標を設定した。自分の目で人々の生活や住まい、民族的な踊りを見る。自分の鼻でその土地の風土、食事では香りを嗅ぐ。自分の口でネパールで話されている言葉を話し、現地の料理を食べる。自分の耳で、話されている言葉を聞く。自分の肌、手、足など体全体を使って地域の人と触れ合う（ハイタッチ、ハグ、一緒に踊る)。ネパールの文化や風習などを尊重した上で、ネパールの人々と同じ目線で学んでいきたいと思った。

わたしは将来、栄養関係の仕事に就きたいと考えているため、五感の中でも味覚に焦点を置いた。そこで私は、料理をする際に１番大切な衛生問題は水だと考え、ネパールの水・衛生環境に着目した。わたしたちの生活に水はなくてはならない存在である。しかし、ネパールでは容易く使えるほど安全ではないことを知った。そのため、ネパールでの料理は有害微生物などを殺滅し、安全な食品にするために、油を多く使って加熱していた印象が強かった。そのようなことをしなくても安全な食品を食べることができるよう水を清潔にする必要があると考えた。近頃は手を洗うこと、飲用水として生水を使わないことなど衛生環境に対する知識が最近少しずつ広まってきているが、今後の衛生環境の改善として、さらに多くの人に広める必要があるという課題を見つけることができた。

そのほかに、日本とは違う宗教観から生まれる文化、食生活、言語のそれぞれのことを実際に感じ、１番印象に残っているのは、水問題だった。ネパールのトイレは水を流す機能がなく、トイレットペーパーがなかった。さらにトイレの後手を洗うという概念も最近になってやっと広まり始めたということに、私は驚きを隠せなかった。ホテルではシャワーから出た水が黄色く、蛇口から出る水は飲んではいけなかった。これらは日本では考えられないことだった。日本で蛇口をひねれば安全な飲用水が出てくることは当たり前ではないと改めて感じた。わたしたちは研修としてネパールを訪れ、一日必ずミネラルウォーターが配られたため、ホテルでも蛇口の水を口に含むことはなかった。しかし、現地の人々でも生水を飲み体調が悪くなると聞いた時、全ての人がミネラルウォーターを口にすることができないため飲み水の改善を大きな目標にする必要があると感じた。

そして、海外研修に行き日本を違う角度から見ることができ、気づく課題が多かったとともに、ネパールの水、衛生環境の現状、改善策などネパールに対する支援のあり方についても学べた。また、日本にも困っている人がいるのではないか、先進国という言葉の中にも埋もれている人たちがいるのではないかと考えさせられた。今回海外研修としてネパールに行き、海外の衛生環境についての現状を見て、海外への支援の大切さを実感した。そして、日本は豊かという印象を持たれる先進国であるのに、「貧困率」の高い国のひとつなのはなぜなのかと考えるきっかけとなり、日本の人々のための活動にも力を入れたいと思う契機になった。そして、この研修で学んだことを多くの人に知ってもらう活動もしていきたいと思う。

ワークショップテーマ：「フェアトレードの活動を通して海外支援に目を向けてもらう」

WHAT　海外支援として文化祭の JRC 部でフェアトレードの商品を販売する

WHEN　2019 年 7 月 13･14 日 9:00～14:00

WHERE　青森県立青森南高等学校 2 年 5 組（生徒会に割り振られたクラス）

WHO　活動者:JRC 部員

対象者:青森南高校生、文化祭を訪れた保護者、地域の方など

WHY　**「支援の形には自分の利益が相手の利益にもなる支援の形を知ることができる」**

共通のメリット

① フェアトレードの商品を購入することで途上国への国際協力ができる

② フェアトレードの商品の購入を通して途上国の生産者をつなぎ、途上国の現状について学ぶきっかけとなる

③ 身の回りのモノがどうやって私たちの手元に届き、値段はどう決まるのかを学ぶことができる

④ 他に環境を守るための取り組みがあるのではないかと考えるきっかけとなる

⑤ 世界の産地の人々の暮らしや民族について関心を持つようになる

⑥ 貿易の仕組みや市場が先進国と途上国にどのような影響を与えるのかを学ぶことができる

<自分たちのメリット>

① 今までの JRC の活動を知ってもらえる

② 今まで JRC 部として、海外支援に目を向けた活動をしたことがなかったため、この活動を通して他の海外支援を考えることができる

<相手のメリット>

① フェアトレードにについて知らなかった方の場合、フェアトレードのシステムについて知ることができる

② フェアトレードについて知っていた方の場合、実際に文化祭での活動を見て、より積極的にフェアトレードについて行動しようと思うきっかけとなる

①、②の方合わせて、文化祭に来ていただいた方が、周りの人に伝えることで活動が大きな輪となり、フェアトレードについて関心が深まり、フェアトレードの商品を購入するようになったり、イベントに参加しようと思うきっかけとなる

感想文

当たり前の違い

山形県立山形北高等学校　岡田柚佳

今回のスタディツアーは私にとってはじめてだらけのとても濃い一週間でした。
はじめてカトマンズに到着したとき感じたのは気温さと日差しの強さです。また、ホテルへ移動するとき、バスの中から見たカトマンズの町は日本より道路が広く信号が少ないと感じ、砂ぼこりが舞っていました。そのため、歩行者はマスクをしている人が多く、白いマスクではなくマスクの色が黒かったり、柄物をつけていたりと、日本ではあまり見ない風景でとても新鮮でした。道路状況は自動車よりもバイクやバスの方が多く走っており、絶えずクラクションが鳴ってたり、バスとバスの間がほんの数十センチくらいだったりと思わずひやひやすることが多くありました。

現地の赤十字社へ伺ったとき、多くの人からの歓迎の挨拶を受けたり、おもてなしを受け、まるで久しぶりに帰省したかのように感じ心が暖まりました。この一週間で一番使った言葉である「ナマステ」はどんな時間に関わらず使われているあいさつで、両手を合わせ、相手の目を見て使うことをやりながら知り、あいさつをしあう大切さや嬉しさに触れることができました。現地の学校へ訪問しに行ったときも溢れるくらいの歓迎の花の首飾りとあいさつと笑顔で迎えられ、とても嬉しかったです。握ってくれた手は力強く、言葉はわからなかったけど表情や仕草で教えてくれ、優しさを感じました。

また、改めて思ったのはやはりネパールの衛生面や環境はまだ整っていないことです。現地の学校に行く際に通った道路状況は悪く、でこぼこで普通車が通れるような道ではありませんでした。村は都市部とは気温差が激しく、火で暖をとっているところもありました。農業もいまだ技術は伝統的で原始的な方法で行われており、また平地が少ないため、限られた穀物類しか育てられないことをお聞きして日本や世界の農業技術の必要性を感じました。トイレは水洗でないが、赤十字支援により学校の子供たちも衛生面を大切にしていることを実感できました。しかし便器のないトイレもあることを知り驚きました。

わたしはこの事業をとおして、赤十字支援などによる日本とネパールの繋がりの大切さと国が最終的には強くならなければならないことを学びました。ネパールは農業国ですが、主に穀物類を生産しており、果物類はインドからの輸入に頼っているのが現状であることを知り、多様性の必要を感じました。ビニルハウスや農薬、品種改良などの先進国の技術を用いることでより農業を発展させ、豊かにできるのではないかとおもいました。今回の機会はとても貴重で有意義なものでした。今回学んだことを自分の将来に生かせるように忘れずに生きていきたいです。

ワークショップテーマ：「ネパールにいきたい！募金したい！と思ってもらえるきっかけづくり」

WHAT　ネパールについて得た知識をプレゼンテーションにして発表し、ネパールの郷土料理を味わってもらう

WHEN　2019 年 2 月 14 日　放課後（16:00-17:30）

WHERE　ＴＶがある教室（地学室、社会科室、生物室）

※ＴＶがない場合、プロジェクターを用いて空き教室で行う。

WHO　自分　（対象：JRC 部員　17 名）

WHY

【相手のメリット】

①発表を通してネパール独自の文化や食について学ぶことが出来る。

②日本の衛生面の高さを知ることが出来る

③海外への興味がわくきっかけになる。

【自分のメリット】

①自分の学んだことを伝えることができる。

②体験したこと、感じたことを整理することが出来る。

感想文

スタディーツアーに参加して学んだこと

福島県立白河旭高校　坂田実紀

私は、12 月 22 日から 29 日まで日本赤十字社主催のスタディーツアーに参加させていただきました。訪問した国は、ネパールです。
私は、このスタディーツアーでたくさんの経験をしました。
ネパールの伝統文化に触れたり、普段の生活に触れたり、とても貴重な体験をしました。
例えば、ネパールの伝統的な食事「ダルバート」を食べました。
とても食べやすく、美味しかったです。
一番、私の中で残っている出来事は学校訪問です。
行く途中の道はとてもでこぼこで危険でした。
まだ道路の整備が整っていない事がわかりました。
ネパールの現状を知れました。
学校に行くまで２時間以上かかり、子供もすごく大変そうでした。
ほとんどの生徒が歩きで通っており、車との距離が近く危険だと強く感じました。
しかし、運転手の方の技術が凄く、最後まで安全に乗ることができました。
学校に着くと、現地の子どもたちが温かく迎えてくださりとても嬉しかったです。
現地の子どもはとても明るく一緒に過ごしてきて、楽しかったです。
しかし、子供の中でも格差があったと感じました。
特に、小さい子供は帰るときに「ペンをちょうだい」と言ってきました。
全員が満足した教育を受けられていないことを実感しました。

学校訪問２日目では、現地の子どもと一緒にプランテーションを行いました。
この場所に自分の名前が刻まれるということは、とても感慨深いものでした。
トイレに行ってみると、とても簡易的なもので日本とは全く違っていました。
壁には、手の洗い方が一面に書いてあり衛生についての教育が整っていることがわかりました。
現地に行かないと分からないことが多く、凄く充実した２日間でした。

残りの２日間は主にカトマンズの市内観光を行いました。
クマリの館へ行ったり、ダルバール広場に行ったりしました。
クマリについてデニシさんやタパさんに聞きました。
クマリになった女の子は、クマリの館にずっと過ごすことになり親とも離れて暮らします。
周りの子どもたちは外に出て遊んだり、学校に通ったり、普通の生活を送りますが、クマリになった女の子はそれができません。
クマリになった子供はとても可哀想だと思いますが、ネパールの伝統文化を守っていかなければいけません。
これから、クマリについては重要な課題になると思います。

ウエルカムパーティでは、ネパール赤十字社の方々とたくさんお話ができました。
ネパールの現状やこのスタディーツアーで学んだことを話しました。

この一週間すごく貴重な経験をさせてもらい、私の人生が変わったような気がしました。
このメンバーで行けたことに本当に感謝しています。

ワークショップテーマ：「ネパールの事をみんなに知ってもらおう！！～壁新聞作成～」

WHAT　ネパール研修のことについて、壁新聞を作成する

WHEN　2019 年２月 21 日～３月４日に書く。

2019 年４月８日～５月 31 日まで掲示。

WHERE　福島県立白河旭高等学校・校舎内(職員室前・ＪＲＣコーナー)

WHO　活動者→ＪＲＣ委員（５人）

対象者→全校生（560 人）

WHY

自分のメリット→壁新聞という手軽なコミュニケーションツールによって短い期間で多くの人に伝えることが出来る

相手のメリット→壁新聞によって、国際理解・親善について理解が深まり、世界に目を向けたボランティア活動を可能にする。

感想文

「スタディツアーで得られたまなび」

洗足学園高等学校　常川美羽

カトマンズに到着した時、私はネパールにいるという実感があまり湧きませんでした。カトマンズの空港は羽田空港と規模が全然違い、道路の舗装状態や建物の造りも日本とは全く異なっていたけれど、どこか日本にいるかのような感覚でいました。そんな中でしっかりと外国にいることを実感したのは訪問先の学校に到着した時でした。いま考えると、それは学校に行くまでは、私は日本語に囲まれていたからだと思います。このスタディツアーの参加者はもちろんみんな日本人で、ガイドさんや通訳の方も日本語なので、空港やバスの中、ホテルなどではほとんど日本語しか使っていませんでした。しかし、現地の学校に着くと、スピーチはネパール語と英語で行われ、子どもたちと交流するときは通訳の方もいないので日本語を使うことはできません。英語が苦手な私には、自分の考えを伝えることも、相手の伝えたいことを理解することも思い通りにいかず、言語がとても大きな壁のように思えました。その時に、自分はいま日本の外、外国にいるのだと強く実感しました。それでも、現地の子どもたちは笑顔で歩み寄ってきてくれました。簡単な英語や、ジェスチャーを使って私たちとコミュニケーションをとろうとしてくれる様子を見て、私も何とかして意思を伝えられるように頑張ろうと思いました。同じ言語を使うよりも圧倒的に効率は悪いけれど、苦労してできた意思疎通は普段のコミュニケーションの何倍も嬉しかったです。そして、言語の違いは壁ではなく、言語は意思疎通を図りやすくする手段の１つであって、コミュニケーションをとる方法は他にもあると学びました。

また、今回のスタディツアーでは自分とは異なる考え方に多く触れました。ネパールの中でも地方に住む子どもたちは、私よりも将来への考えが固まっていて、また、それに対する強い意志も感じました。金銭感覚が日本とは異なるため、募金への考え方も違いました。自分とは違う考えを持っていたのはネパールの人たちだけではありません。このスタディツアーに参加したメンバーも、同じ事を経験しても、感じ方は人それぞれでした。毎晩、意見を交換していく中でたくさんの発見がありました。そして、自分の見えている世界が広がっていくことが実感できました。

この８日間で気づいたこと、経験できたこと、学んだことは、ここで書ききれないほどたくさんあります。その経験を自分の将来への糧にするだけでなく、自分の周りの社会にも還元できるよう努めようと思います。

ワークショップテーマ：「未来の世代に、繋げていく。」

WHAT　小学生を対象としたイベントの開催

WHEN　2019 年夏休み前の総合学習日または、夏休みの初日

WHERE　洗足学園中学高校校舎 1 階

WHO　スタッフ：洗足学園中学高校 JRC 同好会部員、(有志学生ボランティア)

対象者：洗足学園小学校 5、6 年生 30 人～36 人

WHY

1、これから支援や募金をする人を増やすため。

…支援を続けていくためには、いま募金をしている世代だけでなく、次の世代つまり子供達たちに発展途上国への興味をもってもらう必要がある。ネパールを始めとする世界の災害の現場を通じて世界に目を向けてもらい、1 円玉募金に限らず、これから自分達にできる事を考えてもらう。

2、いま支援をする人を増やすため。

…子供達が興味を持ったことを親に話すことで、募金をする人が増える。

自分たちのメリット:支援の拡大が図れる。

自分達の持つ知識を、発信することで活用できる。

JRC の活動を知ってもらえる。

準備をする段階で新たな知識を得られる。

相手側のメリット:これからさらに国際化が進むことが予想される社会を率いていく子供たちに、世界について考えるきっかけを作る。

グループワークを通じて、他者の価値観を知ることで視野が広がる。

新たな災害に関する知識を得られる。

洗足学園中学に進学を考えている生徒は、中学校生活の様子を知ることができる。

感想文

「青少年赤十字海外支援事業スタディツアー」ネパール

石川県立翠星高等学校　大家秀喜

僕は平成30年12月22日から29日までの8日間ネパールへ行って来ました。
赤十字が海外で支援する活動の一環としてです。22日から29日までの、活動内容やネパールで見てきたことや出来事、その時、僕が感じたこと思ったことをレポートにまとめてみました。
22 日の夜、羽田空港から出発しました。バンコクに早朝に到着しまた乗り継いでカトマンズに行きました。カトマンズに到着してから、まずネパール赤十字青少年赤十字課を訪問しました。そこで、ネパール地震復興支援事業について現地赤十字職員の方からのレクチャーをしていただきました。地震が起きてから何年も経っているのでだいぶ復興が進んでいるということでした。しかし、まだまだ復興途中だとも言っていました。

３日目はカトマンズから移動し、ポカラに行きました。この日はポカラ観光でした。ペワ湖に行きました。ペワ湖では手こぎボートに乗りました。初めて手こぎボートに乗ったので内心、転覆しないかひやひやしながら乗っていましたが、慣れた人がこいでくれたので快適に乗ることができました。
４日目は、ポカラから移動しシャンジャに行きました。ここでは、現地の JRC メンバーとの交流会がありました。ネパールの中学生、高校生の生徒たちが、歓迎の踊りで出迎えてくれました。両国の JRC 活動の紹介をした後、僕たちは日本から、鳴子を持参しメンバーの９人で、ハッピを着て、「よさこい」を披露しました。その後、青少年赤十字の紹介をし、親交を深めました。その日のうちに、パルバトから移動し、カトマンズに行きました。

５日目は、カトマンズ市内観光でした。ダルバール広場や、クマリの館を見学しました。マッラ王朝からシャハ王朝にかけてネパール王国の王宮として永らく栄えたのが、現在カトマンズの中心に位置するダルバール広場です。クマリの館は、クマリと呼ばれる少女が、幼少期から親元を離れ、生活をしている場所です。偶然にも、僕たちが、見学をしていた時に、クマリの少女に出会うことができました。小さい女の子なのに、すごい迫力があり、僕はその迫力に圧倒されました。その日の夜は、ネパール赤十字社主催のフェアウエルパーティがありました。パーティがあった場所は、昔、王様が、住んでいた場所でした。今は、改築し高級レストランになっていました。王様が住んでいただけに、すごく立派な建物でした。レストランでは、伝統芸能を見ながら、ネパール料理を、いただきました。料理はすごくおいしくて、とても楽しい夜になりました。

６日目は、最終日です。シヴァ神を祭ったネパール最大のヒンドゥー教の聖地、パシュパティナートに行きました。ここは、世界遺産にも、登録されている場所です。ネパールの人たちは、お墓を持たないので、このパシュパティナートの裏側にある火葬場で火葬し、残った灰を、川に流すそうです。僕は、少し衝撃を受けました。僕の中では、お墓というのが、普通だったけど、国やその土地の風景が、違うと、色々なことが、違ってくるのだと強く思いました。この日の夜に、カトマンズを移動し、バンコクに入り、帰国です。バンコクから乗り継いで、羽田に無事到着です。

僕は、今回のスタディーツアーを通して、ネパールは、発展途上国で、衛生面がまだまだ日本より劣っていると思いました。でも、JRC の活動を通して、衛生管理の支援を少しはすることができました。思っていたより、ネパール人の方々は優しくていい人ばかりでした。僕は、初めてネパールに行ったので、間違えて女子トイレに入ってしまいました。その時もネパールの方々は、優しく教えてくれて「なんて温かい人なのだろう」と思いました。普段は、英語で会話していたのですが、好きな色を聞かれたときに発音がわかりにくく、言葉の壁を感じました。でもとても良い経験をしました。また行きたいと思いました。

ワークショップテーマ：「１円玉募金をして、水の浄化装置をネパールに送ろう。」

WHAT　自分たちで出来ること：１円玉募金とネパールについて啓発する

WHEN　2019 年 5 月 20 日周辺（定例会の日）

WHERE　金沢公民館

WHO　活動者：自分

対象者：県内 JRC メンバー（100 名）

WHY　ネパールの水事情の説明（水道水も飲めないなど）をし理解を促す。

【相手のメリット】

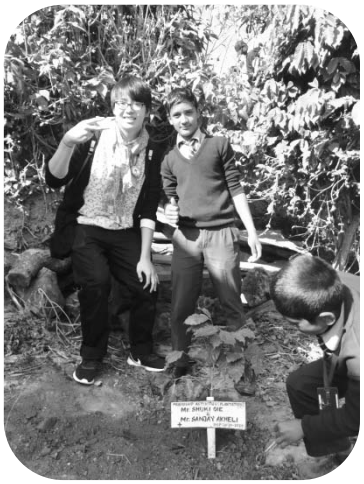
・県内・・・ネパールの水事情を知ることで、グローバル化に対応できる。

・ネパール・・・安全な水を飲むことが出来る、病気にならない

【自分のメリット】

・JRC の活動を知ってもらえる

・ネパールの人たちと交友関係を築くことが出来る



感想文

Peace in Nepal and Japan

羽衣学園高等学校　的場祥之介

私はネパールと最初に聞いたときアジア最貧国で衛生面が劣悪、地形的に農作物が育ちにくい環境でインフラが整っておらず、航空機の墜落事故の多発している危険な国にこの歳で経験させて頂けるなんてという興奮と不安を今でも覚えている。
ネパールに着いてから少し経って思った。貧困は目に見えない場合もあると。
カトマンズなどの主要都市は外見上アジア最貧国から目まぐるしく発展してるように見えるが、実際は外見だけで中身はとても貧困という箇所が多いとバスガイドさんも言っていた。そのせいであまり世界には貧困ということが広く伝わらず、国際通貨機関（IMF）によると世界で最も貧しいワースト２５位アジアでは１位と言っても過言んではないほどなのに対し支援があまり目立っていないと私は思った。

一番身近な危険は交通機関だと思った。私はカトマンズやポカラなどのネパールの中でも発展している区域に行ったが一つしかまともな信号が無く、信号がない大通りでは警察が誘導して信号の役割りを行なっていたが、それも数回しか見ていない。何回も危ないところを見てきたが彼らにしてはそれが当たり前なのかもしれない。私も実際、車に乗った時、犬、人、車とすれ違うと１０cmぐらいしか相手との距離が空いてなかったなど頻繁に起きていて、なぜか最終日近くになると慣れてしまった。ネパールの人たちも安全意識が低く、自分は慣れているから速度を崖っぷちの道路でも出していい、シートベルトはドライバー以外しなくて良い、なぜしないの？と聞くとみんなしていないからいいのよと返事が帰ってきた。通行人も同じく横断歩道が少ないため、皆自分勝手に渡り、はねられそうになっていたり信号があるにも関わらず、警察がいないと赤でも渡るのが当たり前のようであった。
それを改善する方法はインフラの整備、法律の強化、教育。この三つが成り立たなければ改善の余地はないと思う。

その三つの中で一番土台となるのが教育だ。全ての発展途上国に言えることだが、教育は貧困を覆すkey になると私は思っている。しかしネパールに行って疑問に思ったことがある。それは教育の質が高くなければネパールは貧困から逃れることは可能なのかと。衛生問題についての環境は、私が見た限り改善の余地もある。ネパール各地に衛生についての意識は普及していることは確かだ。しかしもっと国が発展するようなプログラムを組み込んだ教育の普及率は少ないと思う。そして医療関係のプログラムも含むべきだ。

現地の人に将来の夢は？と聞くと大半の人たちが医者，看護師になりたいと思っており、他の子供たちも明確に将来の希望を持っており、次の世代を担う子供たちが沢山いる。
私はそれらを支援するプログラムも強化していくことを望み、将来私にできることがあれば実行し、支援していく。

ワークショップテーマ：「ディスカッションによる Revolution」

WHAT　起業し、ネパールや他の発展途上国に支部を設置し、教育,技術提供,雇用を生み出す。留学プログラムを検討してもらう。日本全国ディスカッション団体(現在運営中)だけでなく世界の中学生や高校生,大学生、財団,企業の方々とディスカッションし、様々な問題を考え、実行する。SNS での呼びかけ拡散、人脈を広げる。

予定が決まってることは関西圏での討論会。終了したことは Rotary Club 大阪地区での発展途上国の具体的な実態&発展途上国への留学支援プログラムの設立を提案。

今回は全国オンラインディスカッションを主に実施する。

WHEN　オンラインでのディスカッション団体ではいつでも実行可能。

WHERE　どこでも可能

WHO　世界の中学生や高校生,大学生、財団,企業の方々。しかし実行力,決断力,行動力,協調性がある者が好ましい。

WHY

<私たちと参加者のメリット>

•自分たちと同じ目的を持っている者、社会に尽力を尽くしている者と出逢える。

•様々な支援内容を教え合い知ることができる。

•将来、様々な事業を展開していきたいものが多く、サポートし合える。

•様々な事業展開を若いうちからやっているものが多くその体験や内容を教えてくれるので世界が広まり、自分の経験値が上がる。

•あらゆる国々の性格や文化に触れることができ、より多様な考えをもてる。

•自分がしていきたいことに賛同してくれることが多くより素晴らしい社会を作る基礎を皆で作りあえる。

•現実的に不可能なことが可能になる可能性が高くなる。

<発展途上国のメリット>

•将来あらゆる先進国の若者が発展途上国にフォーカスし、成熟国となるきっかけを設けられる。

•現地の子供達の夢を可能にできる。

•現地の人たちは国際的になり、より広い人脈を得ることができる。

•貧困から脱出し、自国の様々な問題を自分たちで解決でき、自国を成長させることができる。

感想文

ネパールに行ってみえたこと

滝川第二高等学校　廣瀬未沙

１．動機・目的

私がこのプログラムに参加を希望した理由は、幼い頃から赤十字と関わりのある仕事に就きたいと考えており、そのため赤十字の活動を色々な方向から知ろうと思っていたことと、中学生の頃に部活の一環で海外のスラム街の現状を見、貧困生活についても興味があったからです。また、日本とは違う文化、考え方を直接身体で感じたいと思ったからです。話を聞く機会がたくさんあったとしても「百聞は一見に如かず」という言葉もあるように、本当に理解するためには実際に足を運ばないと分　からないと思いました。

それらのことを踏まえ、私は今回ネパールで達成しようとすることで自分自身の成長を期待し、自身の殻を破り、自己の考え方、意見をしっかり伝え、理解を深めたいと思いました。

２．実際にネパールへ行って

ネパールへ着き最初に思感じたのは気候の違いです。陽がさんさんとしており、冬とは思えないほどの暑さを感じました。日本より暑いことは知っていましたが、これほどまでに違うのかと着いて早々身体でしか感じられないようなことを学びました。また、バイクが多いこと、動物と共存していることも日本にはない光景であると思いました。

その後のプログラムでも、印象に残ったことが多々ありました。まず、地震の復興についてです。2015 年に起きたネパール地震。発生から三年たってもまだ復興はしきれておらず、今なお工事中の建物が多くありました。研修二日目にネパール復興支援についての講演を聞き、資金面と時間の少なさが完全な復興を遅くしている原因であると知りました。復興は地域の人々が協力してやるのですが、その人々の大半が農業をしているため、収穫期などの忙しい時期は復興にかける時間が減る上に、祝日が多いためなかなか進まないのだという。祝日はどこの国でも同じくらいの日数だと思っていたのですが、ネパールでは大型連休のように長く、多いということが少し驚きでした。

次に、パルバトの学校の生徒との交流時に行われた最後のフリータイムの時間で現地の生徒からの質問についてです。「日本はなぜ支援をするのか。見返りを求めているのか。」。私はその言葉を聞いてショックを受けました。自分たちは今まで貧困地域に住んでいる人を助けたいという一心で活動していたのに、実際はそうみられていたのか。と思ったからです。赤十字の七原則の世界性に、「赤十字・赤新月は世界的機構であり、その中のおいてすべての赤十字社、赤新月社は同等の権利を持ち、**相互援助の義務を持つ**。」と書かれています。このような記載の有無に関わらず、日本では助け合い精神を当たり前のように持っています。しかし、それは自分たちの置かれている環境が裕福だからそう思えるだけなのか。そう思うと少し悲しくも思えました。

メンバーからも多くのことを学び、吸収することが出来ました。英語がとても上手いメンバー、行動力のあるメンバー、自分の意見をはっきりと言えるメンバーなど自分に足りないものをたくさん持っており、とても良い刺激になりました。また、研修中毎日行われていたチームミーティングでも、すべてのことを肯定するのではなく、「ここは同じ意見だが、そこは自分はこう考える。」というような個人個人の考えの違いを言い合えたことで、たくさんの視点から物事が見れるようになったと思います。しかし、意見を出せば出すほど自分のことしか見えなくなり、チームの話し合いではなくなったこともあったため、これからの活動で気を付けていかなければならないと感じました。

３．まとめ

この一週間の研修を終えて、ネパールの民族文化や生活状況の一端を直に知ることが出来ました。今回の訪問したことでの自身の達成度は未だ未完でありますが、それはこれからこの活動を周囲に広め、将来役立てることで仕上がっていくと思います。

最後になりましたが、事前研修から今回のスタディーセンターを支えてくださった方々に感謝するとともに、このような素晴らしい活動に代表として選出され、参加出来たことを本当に光栄に思います。一緒に派遣されたメンバーとも、最高の一週間を過ごすことが出来ました。これからこの経験を今後の活動に生かしていきたいと思います。

関係者の皆様、本当に有難うございました。

ワークショップテーマ：「見える支援にするために」

WHAT　兵庫県のＪＲＣ部のメンバーで集まり、ネパールの活動を報告すると同時にこれからの募金活動や支援活動の在り方について考えて話し合う場を設ける。そして話し合った意見を基にできることを実際にやってみる。

WHEN　意見交換　2019 年　４月７日　１０時～１２時３０分

実際の行動　2019 年　４月７日以降　６月までに

WHERE　西神中央駅（神戸）の近くにある商工会議所

WHO　活動者：自分　　対象者：学校の部員　約５０名

活動者：学校の部員　１０名　対象者：兵庫県の中高生　約４０名

WHY　支援の意識向上

〈自分のメリット〉

①自分の活動を相手に伝えることができる

②いろんな人の意見を聞くことができる

③みんなでこれからの支援について考えることができる

〈相手のメリット〉

①自分が募金活動をしてどう現地が変わったのかを知ることができる

②自らが考えて動くこと（考動）が出来る

③現地の人達の様子を知ることができる

④より募金活動を頑張ろうという意識向上につながる

⑤話し合いを通じていろいろな人と交流ができる

感想文

「現地に行かなければわからないこと」

岡山県立西大寺高等学校　小野陽香

私がネパールへ行き１番感じたことは日本との違いです。文化の違いなどがあるのは分かっていたけれど、実際に現地に行って感じたものは想像を遥かに超えていました。

１番印象に残っていることは、ネパールの国内線が予定時刻より２時間ほど遅れて出発したことです。日本では飛行機が遅れることはあまりなく、遅れたらイライラする人もたくさんいるけど、ネパールの人達は遅れるのはいつものこと、当たり前のように平然と椅子に座り、新聞を読んだり、知り合いと話したり、それぞれがゆっくりとした時間を過ごしていてとても驚きました。その点で日本とネパールを比べると、日本は時間に正確できっちりとしているんだなと思いました。ネパールの人達は急にできた空き時間を有意義に、楽しく過ごしているように感じました。ガイドさんの「飛んだだけいいよ」という言葉がとても心に残っています。ネパールの人達は、悪く言えば時間にルーズだけど、良く言えばマイペースで日々を過ごすことが出来るということで、それはネパールの良い文化だと思いました。

次に印象に残っているのは、パシュパティナートの火葬場です。まず、お葬式をする場所が観光地となっていることが驚きでした。日本では火葬するところを直接見ることは出来ないので、直接亡くなった方をお清めしている所を見ることが出来たり、火葬しているところを見ることで、日本とネパールの葬儀の仕方の圧倒的な違いを目の当たりにしました。ネパールでは骨まで灰にして自然に戻すために川に流しますが、その灰が今川の汚染の原因のひとつとなっています。ネパールの火葬の文化は日本とは違う形の神聖なものなので、残していくべき文化だと思いました。ですが、灰が川の汚染の原因となっているので、その問題をどのように改善していくべきか考えていきたいと思いました。

最後に印象に残っているのは、野良犬の多さです。私は日本であまり野良犬を見た事がなく、怖いイメージしかありませんでした。ですが、ネパールの街には野良犬がたくさんいて驚きました。私の中の野良犬のイメージとはとてもかけ離れている存在でした。人の間を普通に歩いていたり、道端に丸まって寝ていたり、ネパールの人達の生活には当たり前の存在なんだなと感じました。野良犬以外にも、鳩や猿がたくさんいて、ネパールでは動物が大切にされているんだなと思いました。野良犬が増えていることも問題となっています。ネパールの道路にはゴミが沢山落ちていたので、野良犬達はそのゴミなどを食べて生き延びているのかなと思いました。道路のゴミが減れば野良犬の数も増えないのかなとも思いました。

今回のスタディーツアーに参加することが出来て、ネパールへ行き現地へ行かないとわからないことを学ぶことが出来て、とても貴重な体験が出来ました。この経験を生かして、ネパールについてもっと皆に知って貰えるように活動していきたいと思います。

ワークショップテーマ：「実際にネパールへ行き、知ったことや体験したことを伝え、ネパールのことをもっと知ってもらう。」

WHAT　ネパールへ行き、したことや学んだことなどの活動発表をし、また、一円玉募金についても説明する。
WHEN　2019 年 3 月 17 日(日)開催予定のメンバーシップトレーニングセンター事前研修にて発表
WHERE　日本赤十字社岡山県支部
WHO　ネパールへ行った私自身から、メンバーシップトレーニングセンターに参加するメンバーへ
WHY　ＪＲＣの活動の多様性を伝えるため

【メリット】
・ＪＲＣの活動の中に、今回のような活動もあることを伝えることができる。
・ネパールがどのような国なのか、今どのような現状なのか、募金で集まったお金はどのように使われているのかを知ってもらうため。
・ネパールに興味を持ってもらえる。
・一円玉募金を実施する学校が増える。

【自分たちのメリット】
・自分たちがした活動を知ってもらえる。
・ネパールの良さを伝えることができる。

【相手のメリット】
・ネパールについて知ることができる。
・他国について知ることで、自分の考えや視野が広がる。
・メンバーシップトレーニングセンター内で行うワークショップの参考にもできるため（このワークショップを発表する場合）。

感想文

ヒマラヤの風に吹かれ

熊本県立大津高等学校　根岸咲

私は、小学生の頃から赤十字の助産師として途上国で活動する事が夢です。
今回念願であったこの研修に参加させて頂く事が出来ると分かった時は、大変嬉しい気持ちでいっぱいでした。今まで自分の挑戦したことが無い事にチャレンジ出来るという期待で胸がいっぱいでした。

ネパールでの経験は、全てが新鮮で毎日がとても刺激的でした。そのような貴重な経験の中で特に心に残っている活動の１つは、パルバトの学校訪問です。出迎えの時から凄く盛大に歓迎してくれて本当に嬉しかったです。綺麗なお花の首飾りやお花を沢山プレゼントしてくれました。日本では無い歓迎の仕方に最初は驚いたもののとても嬉しかったです。つたないネパール語でスピーチした事も今となっては、とても良い思い出です。中でもコーヒープランテーションでは学校の生徒達の優しさと温かさを肌で感じる事が出来ました。荷物を持ってくれたり、道が悪いところでは手を繋いで助けてくれたり沢山笑わせてくれたり、本当に楽しかったです。ある生徒が家に連れて行ってくれて、お母さん達と皆でご飯を食べたり話をしたり水牛を触らせてもらったりと言葉は通じないけれどビッグスマイルで楽しいという気持ちなどは共に感じ合えるんだと思いました。生徒達と沢山コミュニケーションを取れて沢山笑い合えた事が私の一生の宝物です。別れのときは凄く寂しくて泣いてしまいました。この出会いは本当に奇跡だと思います。絶対にもう一度彼女たちに会いに行きたいです。

もう１つはパシュパティナート訪問です。ここでは、言葉で簡単に説明することが出来ないような凄く不思議な気持ちになりました。普段日本で生活をしていると生と死について向き合う機会はとても少ないと思います。しかし、この地を訪れた事によって生と死について深く考えさせられました。また、この研修ではネパールの環境問題や衛生問題についても深く考えさせられました。そして、あの巨大地震からの復興などこの研修でまだまだ支援が必要であるという現状を知りました。この研修で学んだことをしっかりと周りに広め伝えていく必要があります。自分が出来ることを日々探しこれからのＪＲＣの活動に生かして行きたいと思います。このような素敵な機会を設けて頂き協力して頂いた皆様にとても感謝しています。ありがとうございました。

微力であるが決して無力ではない。

ワークショップテーマ：「ネパールという世界最貧国の現状を知ってもらう。

自分が出来る事とは何か、微力な事ではあるが決して無力ではない。」

WHAT　①ネパールスタディーツアー活動報告（パワーポイント）
②メディアを使っての活動報告（新聞・テレビ）★特にメディアを使っての活動を軸にする！
③１円玉募金活動(募金箱の設置・街頭募金）

WHEN　2019 年２月期末テスト終了後、手紙を各社に出す。募金は新学期が始まってからスタート(募金箱は月１回月末回収・街頭募金は月１回月末）

WHERE　①大津高校・熊本県支部
②熊本日日新聞社・KKT 本社
③大津高校・親の職場・近くの病院（えうら耳鼻咽喉科）・阿蘇熊本空港・市内(パルコ前）

WHO　活動者…①根岸　咲 ②根岸　咲（熊本県ＪＲＣ部員） ③熊本県ＪＲＣ部員
対象者…①大津高校の全校生徒・熊本県ＪＲＣ部員 ②熊本県民 ③熊本県民

WHY

【自分たちのメリット】
・JRC の活動理解
・活動の幅が広がる
・自分たちが今出来ることについて知ってもらえる
・活動協力者の増加
・１円玉募金の成果報告が出来る

【相手へのメリット】
○ネパール人へのメリット
・ネパールの現状理解をしてもらえる
・１円玉募金の必要性を知ってもらえる
・ネパールの人々を救える
○熊本県民のメリット
・知らなかったことについて知ることが出来る
・視野が広がる
・将来へのキッカケ作り
・国際ボランティアなどに協力したい人が集まれるキッカケ作り
・外国への興味を持っている人のキッカケ作りや事業理解
・小さなことでも協力できる

ヒマラヤ山麓に笑顔があった

団長　柴田女子高等学校　教頭　中村友是

皆さんは青少年赤十字で取り組んでいる「１円玉募金」を知っていますか。私自身、青少年赤十字部の顧問でありながら、途上国への支援のための取り組みで行っていることは知っていたものの、募金（青少年赤十字活動資金）をどのように利用しているかを具体的に説明できませんでした。

平成１６年より始まった青少年赤十字海外支援事業ですが、平成２９年４月から現在、ネパールとバヌアツの２カ国に対して支援しています。ネパールには「持続可能な水と衛生環境を整備しよう」バヌアツには「子どもたちの災害意識を高めよう」といった取り組みが進められています。

幸運なことに私は、青少年赤十字部の第一線で頑張らせてもらっており、今後も継続していく予定でした。ところが今年度より急遽、教頭職に就くことに伴い、若い世代の先生に引き継いでいかなければならないジレンマに陥りました。そんな中、今回の「平成３０年度青少年赤十字海外支援事業ネパールスタディーツアー」の団長として派遣されることとなり、感謝の気持ちで胸がいっぱいになりました。と同時に「自分はついている」と。

ネパールには以前から支援をしてきてはいたものの、平成２７年に発生したネパール大地震の影響により手洗い場の減少、水質の悪化などから衛生環境が悪化し、感染症が流行しました。特にモンスーンの季節になると下痢の流行が顕著になります。

そのような状況を改善すべく、まずは子どもたちが衛生的な行動を身に着けるべく正しい知識と技術の習得、それを家庭や地域コミュニティに普及させ、性別や年齢、障害などに配慮した衛生環境を形成しつつ、維持しなければなりません。また水に起因する感染症の蔓延を防ぐ必要があります。

青少年赤十字の実践目標は「健康・安全」「奉仕」「国際理解・親善」の３つです。世界で苦しんでいる同世代の子供たちのために「１円玉募金」をすることによって「奉仕」の心を学び、その国の文化や生活に関心を持ち、自ら調べることで「国際理解・親善」を進めていくことができます。日本では確立されていると言っても過言ではない当たり前の「健康・安全」ですが、ネパールでは一番に改善していかなければならないことだけに急務な支援です。ネパールの子供たちにいち早く「健康・安全」を届けたい。

全国から選ばれた９名の高校生メンバーは、日赤本社で行われた事前研修で支援事業の概要や目的を理解しつつ、各自で調べてきたネパールについての情報共有をしました。そこでチームとしての目標「ネパールのプロになり、ワークショップ（Ｗ・Ｓ）で発信しよう！」を掲げ、実際に青少年赤十字メンバーが集めた募金がどのように使われているかを調査すべく、いざ出発となりました。

今回は事業対象となっている山岳地帯で十分な衛生環境が整っていなかったシャンジャ郡とパルバト郡の２つの学校へ訪問しました。どちらの学校も大勢の生徒たちが笑顔で盛大に出迎えてくれました。文化交流会なども歌やダンスと大いに盛り上がりました。そんな中、支援によって完成したトイレや簡易水道を整備した手洗い場を見学したところ、手洗いの方法や青少年赤十字のマークが壁に描かれてあったり、石鹸を使い十分な水で手洗いをしているところを笑顔で見せてくれたりと、こちらも自然と笑顔になりました。トイレから出てきたあどけない小さな男の子も、手洗い場で石鹸を使い手洗いし笑顔で走り去りました。こんなに小さな子でも手洗いが習慣化していたので、とても嬉しく幸せな気持ちになりました。ただ、トイレは照明がないため薄暗く、水洗式でもないので臭いがきつ

く不便を感じました。この辺りもまだ改善できる余地があるのではないかと感じました。

パルバト郡の学校では、近くに住む生徒や先生の家に訪問してコーヒーの苗を植樹するコーヒープランテーションのサプライズがありました。植樹後、ネパールメンバーと自分の名前が入った看板を設置し、お互いに笑顔で記念撮影。とても良い記念になりました。やがてこの樹木が大きく成長し、多くのコーヒー豆を収穫できるようになれば現地収入を得られるので、希望の木となりました。いつか希望の木に再会しに行かなくては。

ネパールには笑顔が溢れていました。「笑顔」何よりの薬です。笑いには、リンパ球のひとつであるナチュラル・キラー細胞を活性化させ、免疫力を高め、自然治癒力を高めます。また、脳内のβエンドルフィンという鎮痛作用がある物質を増加させ、体の痛みをやわらげたりと数多くの医学的効果があります。ネパールにもっと多くの笑顔を作りたい。

このスタディーツアーの生活はリーダーシップ・トレーニング・センター（ＬＴＣ）と同じような生活を心がけました。毎晩行われたチームミーティング（ＨＲ）では、本日の振り返りと翌日の先見を欠かさずに行いました。日にちを重ねるにつれて振り返りの内容はより深い核心に迫るような意見交換に変わり、凝縮された濃い時間と表現すれば正しいのでしょうか、無我夢中で時も忘れるくらいの空間を共有し、指導スタッフである私自身も気づかされることが多くありました。このスタツアの指導スタッフで本当に良かった。

２つの学校訪問のほかに、ネパール赤十字社での地震復興支援事業のレクチャー、ポカラでのペワ湖のボート体験、カトマンズ市内観光でのダンバール広場、クマリの館でのクマリとの初顔合わせ、生と死のパシュパティナートｅｔｃ・・・ネパールの人、自然、食事、伝統、文化、宗教、教育と様々な現実に触れることができました。

今回の貴重な８日間の経験を通して、チームの目標「ネパールのプロになり、ワークショップ（Ｗ・Ｓ）で発信しよう！」にあるように、この冊子にはメンバーが各自で気づき、考え抜いたＷ・Ｓが掲載されています。これらのＷ・Ｓは絵空事ではなく実際に実行に移すことを前提に作成しています。ネパールのプロになった９名のメンバーから日本全国の青少年赤十字のメンバーにＷ･Ｓが広まって、より大きなネパール支援ができるように私も身を奮い立たせサポートしていきます。今後のメンバーの活動に期待満載です。

広大に聳え立つヒマラヤ山脈を見ていると普段抱えている悩みや困難はちっぽけなものかもしれません。私が身にしみて感じた「百聞は一見に如かず」。皆さんも是非ネパール連邦民主共和国へ行って見てください。ネパールのすばらしさを体感できるはずです。

国際理解・親善への考え方におけるメンバーの変容

佐賀県立白石高等学校　教諭　松尾一志

報告にあたり、諸活動における報告については、メンバーが行っているだろうことを考え、私は指導者ならではの立場から、高校生メンバーの変容に焦点を当てたい。

まず、さすがは全国から選ばれたメンバーとして、彼らの素養は素晴らしいものであったことを述べておきたい。初対面で、事前打ち合わせを行った時から、モチベーションやコミュニケーション能力の高さを見せ、前向きな姿勢が見られた。その為、打ち解けるまでに時間を要さず、スムーズに核心へと議論を進めることが可能であった。だが、この段階では、具体的な目的意識や目標の形に関しては、メンバー間に差が見られた。そこで今回、指導者がメンバーに求めたゴールはワークショップの作成とその実践である。これにはスタディセンターに赴いての活動報告も含む。当然のことながら、彼らの使命はスタディツアーに行って終わりではない。事後に繋げるため、その経験を踏まえてどのようなワークショップを作成し、実践するのかを問うこととした。よって、一回目の打ち合わせでは、慎重且つ深い内容での目線合わせを行い、目的や目標についての議論を行った。結果、話し合いを通して共通理解が生まれ、スタディツアーの目的に向けて上手く団結していく様子が垣間見えた。この気づき、考え、行動する流れは現地でも同じだ。

ネパールに到着。初日は、正直なところ、現地でのメンバーの積極性に関しては、まだまだ物足りなさを感じた。移動の疲れ、海外経験の浅いメンバーには慣れない状況が要因ではあろうが、現地ガイドの話を聴く態度に貪欲さが見られなかったためだ。直接は指摘せず、あえて指導者が積極的に質問する状況をみせることでメンバーへの刺激を試みたところ、メンバーは即座に修正した。屋外や移動中のバスの座席を見ると、現地ガイドに近い場所を取るように変わったのを覚えている。そして、日程の肝は、毎日夕食後に行うＨＲである。この場では、一日の振り返りや先見を行う。反省も感想も問いかけも共有することで、プログラムの中身がどんどん、深まっていく。メンバーは二日目、三日目と加速度的に変わっていく。初めは司会役を立てていたのが、自然と必要がなくなってくる。一人一人が会を動かしていくように変わっていくのが分かる。そこには、傾聴する姿勢があり、疑問には問いかける態度があり、考えの相違も厭わない柔軟さと強さ、悩ましいことには果敢に挑戦する意志があった。その中でメンバーは文化を、死生観を、人生を語った。よく、「人の話し合いは足し算ではなく、掛け算」というが、まさにその様子をメンバー全員が肌で感じていた。メンバー全員がライバルであり、友であり、そして家族であった。

あるメンバーはこう語った、「このメンバーは、誰かに合わせる必要がなく楽だ。うわべを気にせず、なんでも話せる」。私は、「あぁ、これだ」と思った。この感覚こそ、国際理解・親善の在り方ではないのか。人の考えを受け止めることと、受容することは異なる。単に傾聴して、同調するのではない。違いを違いで認めながらも、意見を交わし、自分と異なる考え方から学び取り、より幅広い視野を身につける。そして、この姿勢を経験として学びとれたことこそが、大きな成果であろうと思う。

未来は国際理解・親善とともにある。今後もネパールでの経験を元に、メンバーがネパールだけでなく国内外で活躍していく未来のリーダーであり続けることを確信している。

青少年赤十字で広がる世界

日本赤十字社　青少年・ボランティア課　主事
矢田　結

青少年赤十字事業として、高校生を連れたネパールへのスタディーツアーは本社主催では約 20 年前に行っており、今回が久しぶりの実施となります。久々ではありますが、当時とは様々な社会状況や組織の様子が異なりますので、20 年前にスタディーツアーに参加した指導者の方や職員にも話を聞き、スタディーツアーの目的や意義を考えながら、ネパール赤十字社と二人三脚となりプログラムを組みました。

青少年赤十字メンバーが実際に現地に赴く、という学びの形は、海外支援事業を見直した平成 27 年度から実現したいと思っておりました。実際に集めたお金がどのように使われているか視察するという意味でもとても価値がありますが、それだけではなく、感受性豊かな高校生の間に現地でしか得られない経験をすることが、今後の青少年赤十字活動だけではなくゆくゆくはその子の夢やこれからの人生を考えるきっかけに繋がるのではないか、という思いの元、青少年赤十字のプログラムのひとつとして企画しました。

私自身、赤十字に携わるようになった大きなきっかけは、中学３年生のときにベトナムにボランティアに行ったことです。当時受けた衝撃が、このような職種を選ぶことに繋がりました。また、そんな私自身が青少年赤十字という、子ども達の教育に携わる立場になった今、赤十字の国際的なネットワークを生かして、価値ある経験を子ども達に提供できたらどんなに素晴らしいか、と思っていました。

今回、スタディーツアーを終え、本当に実施できてよかったなと感じています。初めて外国に行くというメンバーもいましたが、学校までデコボコ道を２～３時間かけて進んだり、ネパール語を使って必死に会話したり、とてもたくましく過ごしていたメンバーの皆さんの姿を見て、感動を覚えました。

特に、毎日の話し合い（ＨＲ）では、学校で何をしたら子ども達が喜んでくれるか、日本の踊りをどのように紹介したら皆に理解してもらえるかを話し合ったり、事業についても、ゴミ箱をもっと置いたほうがより衛生的に過ごせるのではないか、などの示唆をしてくれたり、私自身も今まで気づかなかったことを新しい視点としてたくさん教えてもらいました。

また、この企画を共に進めてくれたネパール赤十字社には、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。対象の学校の子ども達だけではなく、その周りに住む地域の人たちや他の学校の子ども達も招いたり、日本の子ども達とネパールの子ども達の共同作業というコーヒーの苗の植樹を企画してくれたり、最後には素敵なレストランでフェアウェルパーティーを実施してくれました。ただ事業地を見るだけではなく、子ども達が素敵な思い出を作れるように様々な企画をしてくれ、改めてネパール赤十字社と日本赤十字社のつながりを感じることが出来ました。

メンバーがワークショップに記載しているように、このスタディーツアーは「はじまり」で、ここから様々な活動に広がっていくことが期待されます。このような貴重な機会をいただいたことに感謝し、また、今後は支部でも、ネパールという目的地の検討を含め、学びの多いツアーの実施が計画されればと願っております。

現地に思いを馳せること

日本赤十字社　青少年・ボランティア課　主事
沼倉　朋恵

今年は、２年に１回開催される国際交流を行い、さらに約 20 年ぶりに海外支援事業地の１つ、ネパールへのスタディーツアーと私にとり国際色の強い１年となりました。

青少年赤十字の３つの実践目標の１つ「国際理解・親善」は日本国内で行っている１円玉募金に留まることなく、海外姉妹社の加盟校や JRC メンバーの活動・目的に結びついていることを実感できたツアーでした。

私が、ツアー参加者に対面したのは第１回事前研修後、出発当日の最終事前研修の日。メンバーからは「このツアーが終わってもみんなとこれからも続く関係になりたい」というメッセージ、またグループ目標は「ネパールのプロになること」と知りグループが１つの目標に向かい気持ちを一つにしていることを感じたことを思い出します。

今回は主催の立場でしたが、事業地ネパール訪問は初めてであり同行という立場が強かったため、参加者のことを傍でよく見、同じ立場・視点で参加者が現地で感じる感情や思いを汲み取ることを念頭に置きつつツアーを過ごしました。

本ツアーの最大の目的である学校訪問では、限られた時間の中でも現地子供達は精一杯のおもてなしをしてくれ、ネパールのこと、自分達のこと学校のことを知ってほしいと思うメンバーの心が伝わってきました。それに日本メンバーも応えようと耳を傾けたり、一生懸命話しかける姿をみて子供達の心が交わるには時間はかからないのだなと実感しました。また学校訪問以外にもネパールの食・文化・宗教・歴史を学んだ日の、食事時間や毎晩行うチームミーティングでは、些細なことから自分達の恵まれた生活・学校と大きく異なる環境の友人たちについて考え、葛藤しつつ「自分達の当たり前はここでは当たり前ではないし、恵まれていることに感謝しよう」など考えを共有し帰国後のワークショップへと繋がるきっかけもたくさん得ていました。

この７日間のツアーでは、支援事業地の視察だけでなく、「ネパールのプロ」を目指す９名が個々の目的のために尊重しあいつつ、同じベクトルに向かって切磋琢磨し「気付き、考え、行動」している姿がありました。

学校訪問での両国 JRC メンバーの交流の場面で投げかけられた「募金をしてくれるのはなぜですか？」という現地メンバーの言葉。この事業は限られた期間の支援ですが、私たちは現地に赴き感じた思いがあります。ツアーが終わったあとも現地に思いを馳せること、そして皆さんが作った WS（活動計画）をスタートとし発信者でありつづけることで支援を繋がる・繋がっていけるものにしていけることを確信しています。

最後に本ツアーでの多くの出会いに感謝しています。

平成 30 年度青少年赤十字海外支援事業　ネパールスタディーツアー報告書
発行：日本赤十字社　事業局　パートナーシップ推進部　青少年・ボランティア課
〒105-8521　東京都港区芝大門 1-1-3
TEL:03-3437-7083
FAX:03-3432-5507
Email:rc-junior@jrc.or.jp
URL:http://www.jrc.or.jp　こちらのページからも本報告書をダウンロードできます。